

BULLETIN OF THE
OSAKA PREFECTURAL
FISHERIES EXPERIMENTAL STATION

No. 15

大阪府立水産試験場研究報告

第 15 号

大阪府立水産試験場

平成16年 3 月

目 次

2002年春期に大阪湾東部海域で発生した麻痺性貝毒について 山本圭吾……………	1
漁獲努力量でチューニングしたコホート解析による瀬戸内海東部3海域の イカナゴ <i>Ammodytes personatus</i> 当歳魚の資源尾数推定 日下部敬之・保正竜哉・玉木哲也……………	9
石桁網で漁獲されたマコガレイ小型魚の再放流後の生残について 有山啓之・日下部敬之・大美博昭・辻村浩隆……………	17
大阪湾に生息するシャコ類について 有山啓之……………	23
シンポジウム 大阪湾におけるマコガレイの生態と資源変動……………	29

CONTENTS

Occurrence of Paralytic Shellfish Toxins in the Spring of 2002 in east side of
Osaka Bay Keigo Yamamoto..... 1

Estimation of Resource of 0-age Sand lance *Ammodytes personatus* in eastern
Seto Inland Sea by tuning VPA using fishing effort data
Takayuki Kusakabe, Tatsuya Hosho and Tetsuya Tamaki..... 9

Survival after release of small marbled sole *Pleuronectes yokohamae*
caught by Ishigeta dredge
Hiroyuki Ariyama, Takayuki Kusakabe,
Hiroaki Omi and Takahiro Tsujimura..... 17

Stomatopoda in Osaka Bay
Hiroyuki Ariyama..... 23

Symposium
..... 29

2002年に大阪湾東部海域で発生した麻痺性貝毒について
山本圭吾

2002年春季に大阪湾東部海域で初となる麻痺性貝毒による二枚貝の毒化が確認されたため、毒化原因プランクトンの出現状況、貝の毒化、毒の減衰状況等を調査した。その結果、原因プランクトンは*Alexandrium tamarense*であり、最高37cells/mlの細胞密度にまで増殖していた。また、貝毒の蓄積はアサリ、アカガイ、トリガイで確認され、最高値はアサリにおける18.0MU/gであった。貝毒の減衰状況を飼育と天然海域で比較したところ、飼育条件下では天然海域に比べ毒の減衰が遅く、長期間貝毒の蓄積が見られた。

大阪水試研報, 15, 1-8 (2004)

漁獲努力量でチューニングしたコホート解析による瀬戸内海東部3海域のイカナゴ*Ammodytes personatus*当歳魚の資源尾数推定

日下部敬之・保正竜哉・玉木哲也

努力量データでチューニングしたコホート解析法を新たに開発し、瀬戸内海東部(紀伊水道、大阪湾、播磨灘)におけるイカナゴの初期資源尾数および終漁時残存尾数を推定した。1990~1995年の6年間について推定を行った結果、初期資源尾数は1,205億~2,532億尾(平均約1,660億尾)の範囲で変動しており、漁期中に約60%が漁獲され、30%が自然死亡し、10%あまりが生き残ると計算された。初期資源尾数と漁獲尾数との相関は高かったが、それらと漁獲重量との相関は低かった。

大阪水試研報, 15, 9-15 (2004)

石桁網で漁獲されたマコガレイ小型魚の再放流後の生残について

有山啓之・日下部敬之・大美博昭・辻村浩隆

マコガレイ小型魚再放流の効果を明らかにするために、2001年5~11月と2002年3月に石桁網試験操業を実施し、3日後の生残率を調べた。生残率は3月には86.1%と高かったが、5~11月は0~27.3%で、8~10月はほぼ全滅状態であった。死亡個体は無眼側の内出血が顕著で、甲殻類や貝殻との擦れが死亡原因と推定された。生残率は高水温や魚体が小型の場合に有意に低いことが示唆された。春季から秋季における小型魚の再放流は効果が小さく、他の施策の検討が必要と考えられた。

大阪水試研報, 15, 17-21 (2004)

大阪湾に生息するシャコ類について

有山啓之

1981~2003年に実施した延べ57回の底曳網試験操業で漁獲されたシャコ類の種組成をまとめた。出現したのは、スジオシャコ、ナンキシヤコ、トゲシャコ、クロビシトゲシャコ、セスツシャコ、シャコ、オキナワシャコの7種であった。量的には大部分がシャコであるが、北部ではスジオシャコが混在し、中部以南ではそれ以外の種も加わって多様性が増していた。他海域と比較すると、大阪湾のシャコ類は瀬戸内海と紀伊水道の中間的な組成を示すと考えられた。国内では記録の少ないオキナワシャコの形態や色彩についても記載した。

大阪水試研報, 15, 23-27 (2004)